
戦神楽Online ~フヨウとイリマ~

神田 松

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦神樂Online～フヨウトイロマ～

【NZコード】

N8470S

【作者名】

神田 松

【あらすじ】

「ぐく一部の技術だけが発展した、ごく当たり前の未来。最新のヴァーチャルリアリティ技術を用いたVR DMMORPG、戦神樂Onlineが世界的な人気を誇っていた。 戦神樂Onlineにおけるとある國のVR牛鍋屋柳生の看板娘にして、ギルド柳生最強の魔法剣士イリマ。これは彼女の受難の日々をつづった物語である。 ウソはついていない。」

プロローグ : トマソ・アントニオ

薙生した岩が乱立する瓦礫の舞台に、少女は黒い刀を手に現れた。流れるような薄香色の髪に紫紺色の戦装束、美しいとも可愛らしいとも取れる顔立ちの少女は懐へと手を忍ばせて内容を確認する。

「回復札も残りわずか、か……ちょお飛ばしすぎてもうたかな……？」

やがて少女はその愛らしくも美しい顔立ちに、さらに凜々しさを持たせるような視線を舞台の奥へと投げかける。

かつ重圧を持たない場違いな黒い正方形が出現した。

ように崩れながら形を変え

やかで人の形になつたかと思えばさらにその周囲に情報の粒子が色々ついた雪のように降り積もりソリッドな情報の骨組みに過ぎないそれに滑らかさと重圧を持たせていく。

やがてこの瓦礫舞台の守護者とも言えるそれは無骨な巨鬼の姿をとつて生命を吹き込まれたかのようにその巨躯を揺らした。

「お出でしゃな、悪にナジ経験地の呪じるわせりやうひだ」

『...』

少女が巨鬼を指差し挑発するようにそう言つと、巨鬼は受けてたつとでも言わんばかりに巨鬼の身の丈もあるうつ巨大な鎧をその手に召還して咆哮をあげた。

少女は身を前に乗り出して駆け出し、巨鬼の後ろを取ろうとするが
巨鬼はその巨躯からは想像もつかないような速さで振り返り後ろを

取られるのを避けようとする。

「「ひおつとど、 そつ簡単に後ひわらじしてくれへんか！」

おどけるように笑った少女に怒りを覚えたのか、巨鬼はその尋常ではない膂力を生かして鉈を少女の居る場所へと振り下ろした。

「ガタン！――」と、轟音とともに爆発的な土煙が上がる。

やがて土煙が晴れると鉈は深く地面を抉り蒼生した瓦礫が放射状に吹き飛んでいた。

その場に少女の姿は・・・ない。

「ナイス足場や」

余裕を感じさせる言葉が巨鬼に投げかけられる。

少女はいつの間にか地面に埋まる鉈を持つ巨鬼の手の上に踏み込んでいた。

『――――――――』 「ほあ――」

まるで蚊をたたくかのような動作で巨鬼は鉈を持つていらない左手で右腕を叩ぐが、少女は軽々とそれをよけて巨鬼の腕を駆け上る。

「失礼な奴あなあ――」

右肩まで上ったところでダン！と跳躍しがむしゃらに振り回される巨鬼の左手を飛び越える。

そして少女は軽く刀を持たない手で刀の刀身に何かを書き込んでいく。

そのままぐるりと空中一回転してガゴー！と遠心力のかかった踵を巨鬼の頭に一撃！！

すると、巨鬼の頭の動きに合わせるように、巨鬼の頭上に沿つて動く一本のラインが少女の目に映る。

微妙に減ったそれは巨鬼の残るHP生命力を示すライフバーである。

ふらつく巨鬼の角へ黒い刀を難いで二撃！！急所であつたのか今度は巨鬼のライフバーが半分ほど削れた！！

黒い刀の切れ味は鋭く、まつ平らに切れてしまった角に両手を向ける巨鬼の脳天めがけて少女は器用に刀を振りかぶる。

刀身に呪文が光りそれを着火剤として刀身が赤い炎に包まれる。

「やあああ嗚呼ああああああ！」

一閃、掛け声と共に少女の炎の一閃が巨鬼の正中線に刻まれた。エンチャントブレイド、南蛮渡来の魔法で刀剣を強化する戦闘技術こそ少女の最も得意とする戦闘スタイルだ。

しかし巨鬼はいまだ倒れず、しかしライフバーは大きく減少している。

そして地面に着地した少女の後ろから、さらに3撃4撃と次々に巨鬼の正中線に燃える炎目がけて日本刀や弾丸が炸裂する。

今度こそ巨鬼は断末魔の悲鳴を上げ、体中に燃え移つた炎に焼かれるように消滅していく。

すると身を隠していたのか瓦礫の影から如何にも洋風といった軽装で、所謂エルフ耳と呼ばれる耳をした女性と物々しい大砲のような銃を持つ足軽風の男が、少女に話しかける。

「な～いす配分イリマちゃん！」

「やはは、途中ノつてもうて危うく倒してまつとこやつたけどな～」

「このベースなら来月の戦に間に合ひのも夢じやないぜ、イリマさんが居てくれて助かつたぜおーしゃアドロップじやないかアレ?」

巨鬼 ボス の討伐における経験値の配給は一撃でもボスに攻撃を命中させた者に等量宛がわれるシステムである。イリマと呼ばれた少女に礼を言つや否や、足軽風の男は巨鬼が居た場所に転がる黒いデータ塊を見つけ我先にと駆け寄りうとしたところ、首根っこを女性に掴まれ制止される。

「待つた、イリマちゃんが倒したんだからこなはイリマちゃんの、でしょ? サカキくん?」

「あだだだ! 見るだけ! ! 見よつとしただけだつてヤナギ! !」

「アハハ、ほなお言葉に甘えてちよお拝見させてもらいますな……」

首根っこをヤナギと呼ばれた女性に、ギリギリと握りしめられる痛みで悲鳴を上げる男^{サカキ} この世界には一定以上の痛みは感じられないように設定されているのだが

イリマは苦笑しながらデータ塊に手を触れてアイテムデータとして圧縮された物理情報を解凍する。

一瞬の閃光の後、イリマの手には何も書かれていない手のひらほど

の長方形の紙切れへと変貌する。

「…? なんやろこれ?」

「回復の魔術符?」

「でも、何も書かれてないぜ？……なんだこりや、リア度2ファ！？殆ど仕様外アイテムじゃねえか！」

うわあ、と三人の顔色が重くなる。

何故かと言えば男…サカキは『鑑定』のスキルをそれなりに高く持つていてる。

彼の高い鑑定スキルでも特定できるアイテムでもないとなると、逆に知名度が少なすぎてそこいらの行商人に聞いても使い方が分からぬどころか価格さえも付いていない可能性が大なのだ。

しかしボスキャラが落としたレアドロップともなればいざれどんでもない価格がついたり使い道が分かることがあるかもしれないから捨てられもない

つまり、彼でさえ鑑定に値を上げる品については殆ど使用法もわからぬ、「捨てる」とのできない『マジ』も同然の物だったのである。

「あらあら…」

「ま、まあ大丈夫やよ。装備欄はまだまだ空きあるし、皆に高い経験値あげられただけでも私は満足なんよ」

残念そうに溜息をつくサカキに、イリマはフオローを入れる。

「ああ、イリマたんは優しいな…流石は俺の嫁ひでぶ…！」

「あらあら、イリマちやんは私の嫁よ」

さりげなくイリマに俺の嫁発言したサカキにヤナギはすかさずボディープローを入れた。

当の本人であるイリマは困ったように苦笑する。

「アハハ…悪いけれど私は誰の嫁にもならへんよー?」

「えへ?」「ま、さうだらうナビなど…」

まるで「それもそつか」とでも言つよつに後ろ頭に腕を組むサカキに、ヤナギが振り返つて問おうとする前に

紙切れを懐に仕舞つたイリマは手を挙げて瓦礫の舞台を走りだした。

「あ、さあへ…最深部にも宝箱があるんよ…せよ行こ…」

「ええつ!…もう、待つてイリマひやあへん!」

「おつとイケね、じやあ早く行こうかねえ?」

そうして三人はその場を去つて行つた。

急速に進化したVR技術ヴァーチャルリアリティによって仮想空間に作られたもう一つの日本…ヒモロギ列島。

常に幾つもの国がこの舞台の霸権を握りうつと戦を繰り返し、そして領土を奪い合う戦国時代の最中

南蛮から渡来する魔法やモンスターを糧とし、そして倒しながら人P

々は各自几口を磨き合ひに迫る戦に備えていた。

戦神樂Online… 今や日本どころか世界中に根強い人気を誇る
VR DMM RPGの超人気タイトルである。

そして…

「んつ…ふあああ…もつ朝か、相変わらず寝た気がしないや」

長屋、と呼べる簡素なアパートの一室で布団から起き上がる青年が
僕だ。

頭に付けたヘッドギア、これが戦神樂Onlineの世界を見せて
いた最新のVRD機器、R·P·G·R[·]。

といつてもこのレプロギアを買つてもう一年になる、流石にこまめに
バージョンアップをしているし
医療用や事務用と言つた専門のレプロギアも開発されてゐる今日に至
つてはもう最新ではないのかもしけないが…

「さあって、今日も学校だ。」

背伸びをし、おいちにーさんし…とラジオ体操をまたジジ臭い運動をする。これでも朝のウォーミングアップには丁度いいのだ。

『この体としての感覚』を思い出すためにも、こうしてこまめに運動している。

僕の夢での姿はイリマであり、70レベルにまで鍛え上げられた魔法剣士の少女で。

そして僕、葵フヨウは…20歳で大学に通う、じく普通の大学生…男である。

そう、誠に遺憾ながら僕は…2年間にわたりVRMMO世界でネクマをやっている。

これはそんな僕の災難の日々を書き綴つたものである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8470s/>

戦神楽Online ~フヨウとイリマ~

2011年10月3日23時14分発行